

卒業生のその後を追って

読み・書き・計算は人生を豊かにする

岸本 ひとみ

小学校を卒業した生徒がその後どうなったのか。中・高分科会で長らく気になっていた話題について、岸本ひとみさんがレポートをしてくれた。参加者は、例年どおり少なかったが、新しく参加してくれた人が、自分たちの実践が先生の役に立っているのか。卒業生のその後に興味があるなど、意外と関心が高いことがわかった。

岸本先生は、同じ学校に二度勤めるなど、教え子の子どもを教えるという島嶼部での実践に似た点が多かったが、特徴として、

○公務員・準公務員率が高い。

○就業年限が長い。

○自営業の二代目・三代目が多い。

○わが子を母校に通わせたがっている。等が明らかになった。

読み・書き・計算の取り組みが学校の文化として息づいていることが子どもたちの人生にもよい影響を与えていることがわかった。

宇都宮のミニレポート「中学の学力保証15年の歩み」との共通点もいくつか見つかった。

午後は、参加者みんなでレポートに関連して子どもたちの現状について語りあうことができた。

小学生の握力が落ちていること、中学を卒業して高校・大学に進んだ子どものようすなど、多くの話題について話をすることができ、有意義な時間となった。

学校ぐるみで取り組むには、読み・書き・計算の取り組みをシステムに組み込んでしまうとよいというアドバイスもあった。

●提案 小山 民子

「小学校の英語教育を考える」

日本で生まれた赤ちゃんが母語を3年で獲得するとして、約5475時間かかる。それに対して日本の中高の英語授業は1000時間といわれている。日常生活で触れる英語の時間で考えると、さらに大きな違いとなる。これでは当然、中高の6年間で英語を日常会話レベルで獲得できるはずもない。かといって英語を小学校の早い段階から教科として学ばせるには英語の発音や文法を学ぶ必要があるため、文の構成や品詞を理解していなければならぬ。そのためにはまず、母語である日本語を意識的にとらえる力を育成しなければならぬ。

そもそも英語教育の教員免許を持つていない小学校教員が英語の発音や英文法を正しく伝えるのは難しい。発音に関してはパソコンやCDに頼った方がよい。2020年から小学3、4年生で週1時間、小学5、6年生では週2時間の授業となり、小学校で600語の単語を扱うことになる。言語を

学ぶ上で大切なのは自ら学ぼうとする姿勢、とにかく英語嫌いにさせないことを小学校の教員には期待したい。

このような現状で、家庭で何ができるか

1. ローマ字の読み書きをできるようにする。
2. 英語に興味と関心を持たせて嫌いにさせない。
3. 単語力と文法が要であること、保護者は一応頭に入れておく。
4. 話したいと思うきっかけを作る。
5. いろいろな言語に出会わせる。
6. フォニックスを活用する。

英語の教科化を心配して子どもを英語塾に通わせる保護者も多いと思うが、まず日本語が十分に獲得できているか、そして子ども本人が望んでいるのかを確認してほしい。言語を学ぶということはその国の文化に触れるということなので本来は望ましいこと。嫌いならず、自ら学びたいと思えるようにしてあげたい。